最終報告書

協力隊を育てる会
帰国隊員支援プロジェクト　26年度

活動名称：　モンゴル　バヤンウルギー県央障害児センターにおける作業療法技術協力
～機能訓練技術の向上と社会参加の促進～

実施期間　2014年8月～2015年9月

モンゴル　障がい児　保護者の会
作業療法士　堤　由貴子

活動の背景

モンゴルバヤンウルギー県は、
首都ウランバートルから約1700km、首都から最も遠く、
最西端に位置する。（下記★ に示す）

活動の背景

モンゴルでの多数派はハルハ族であるが、カザフ族は約4%とされており、その大多数がバヤンウルギー県に住む。バヤンウルギー県では、カザフ族が多数派である。

活動の背景

障害者支援における問題点

・物理的な距離の遠さより、ウランバートル（以後UB）や周辺の県のように海外NGOからの技術協力が受けにくい。（海外NGO等による物的支援や、カザフ族がイスラム教であるため、イスラム諸国より若干の金銭的支援はある。）

・行政や市民に障害者の権利という考え方が浸透していないため、地域の協力を得にくい。

・少数民族であるため、国庫の支援を受ける際には民族間問題による不利が生じるという声も聞かれる。

活動の背景

そのようなバヤンウルギー県において、
障害児センターが経営されている。

活動の背景

バヤンウルギー県障害児センター

組織の形態：
障害児親の会バヤンウルギー支部（本部はウランバートル）
県障がい者センター

沿革：

2004年、活動を開始。現センター長エルランが、娘が障害児であることをきっかけに、障害者教育とリハビリに興味を持ち、モンゴルの移動式住居（ゲル）において取り組みを開始。因みに、センター長は教員である。

その後、自費とWorld Vision Japanやイスラム諸国の支援によって、センターの建物を建設。その後、国庫より建設費用を償還払いにより受けとっている。また、建物の中にも、支援によって贈られた物資が多くある。

物資の数々

物資の数々

活動の背景

現在生じている問題

２点に大別される。

問題１：障害者関連の専門家等、人材の不足。

問題２：センターを経営していく収入源の不足。

活動の背景

現在生じている問題の原因と対応する活動

問題１：障害者関連の専門家等、人材の不足。

原因：技術協力、支援がない。

対応する活動：スタッフとの協働による技術移転。

活動の背景

現在生じている問題の原因と対応する活動

問題２：センターを経営していく収入源の不足。

原因：
①行政や市民による障害者問題の理解不足。
②センター自らが支援金以外の資金を得る活動を実施していない。

対応する活動：
①障害者問題の啓発活動。
②収入が得れる事業の開拓。

実施した活動

スタッフとの協働による技術移転。

センター内リハビリ、病院訪問、自宅訪問の実施。

普段のリハビリの様子

実施した活動

行政、市民への障害者問題の啓発活動。

市民への啓発（障害の日）

実施した活動

行政、市民への障害者問題の啓発活動。

地元大学の障がい児研究者との交流。

地元大学の学会への参加と論文執筆。

実施した活動

行政、市民への障害者問題の啓発活動。

保健局での啓発セミナー。

実施した活動

行政、市民への障害者問題の啓発活動。

日本語教室での紹介

実施した活動

行政、市民への障害者問題の啓発活動。

村でのチャリティーコンサート

実施した活動

収入が得れる事業の開拓。

伝統的カザフクラフト製品の販路開拓。

・日本のNPO　Ninjin

・モンゴル製品販売　スーホ

その他、現在も販売先、販売方法整備中。

実施した活動

収入が得れる事業の開拓。

伝統的カザフゲル体験事業（レンタル、宿泊）の展開。

2015年

6月～9月にかけて、毎月一件、短期間の利用あり。

結果と今後

「技術移転」

協働による技術移転を目指していたが、1月～3月の間、モンゴル経済の悪化により国庫支援金が支払われず、センターでの営業が停止した。その間、村の巡回等を行ったが、その際は、センターのスタッフと共には行えず、一人での活動となった。その後もセンター再開までさらに2ヶ月程度要した。

当然、スタッフも辞め、その後、再度営業再開をした時には、新規スタッフとなった。1年でリハビリ担当の看護師の交代だけでも、6回経験した。

その後、支援金が再度支払われ始め、直近の3ヶ月は、スタッフの変動もほとんどなく、スタッフのモチベーションも上がり始めている。

そのため協働して、様々なプログラムを実施できるようになっている。今後も、連絡を取り合い、アドバイスを続けていく。

結果

「行政、市民への障害者問題の啓発活動」

　様々なイベントに参加させてもらう機会があった。また、私が企画したものに対し協力者が得られたことから、紹介の機会を複数回持てた。

　今後も現地協力者と連携しながらこのような機会を増やして行きたい。

結果

「資金が得れる事業の開拓」

カザフクラフト製品は、観光客に非常に人気がある製品であり、その販売を通じて収入増が見込める。地元のカザフクラフトNPOと契約し、今後も商品供給をして頂けることになっている。

また、夏季のカザフゲル体験も同様、観光客を対象とし、実施可能であることが確認できた。今後も、現地協力者が、管理・利用を行ってくれることとなった。

現在は、整備が不十分であるが、HP作成などによって除々に拡大することを目指す。

以上にて、
最終報告を終了する。

謝辞

今回のプロジェクトに関しまして、ご協力いただきました、

公益財団法人　三菱 UFJ 国際財団
一般社団法人 協力隊を育てる会

の皆様には、心よりお礼申し上げます。

今後も今回の活動を契機に、障害者社会参加支援活動を継続していきたいと思います。